１１期国際・文化学部Ｂ班

日本の通過儀礼と着物文化

リーダー　　田中幸雄

サブリーダー　奥泉洋子・中村周司

メンバー　　市川正典・大澤知一・椎谷節子・中嶋昌江

福井博基・古谷信一・山本峯子・小久保初子

目　　次

１、　テーマの選定理由
1-1 取り組み内容。1-2 活動風景。
２、　日本の着物
2-1 なぜ衣服を着るのか。2-2 日本の着物。
３、　通過儀礼の意義と活動実施項目
3-1 通過儀礼とは。3-2 冠婚葬祭の文化。
４、　帯祝い
4-1 地方によって。4-2 東松山の一部地域では。
５、　出産
5-1 ほうきの神様。5-2 安産子種石。5-3 ローソク。
６、　お宮参り
6-1 忌明の祝いとも言います。6-2 初山参り。
７、　お食い初め
7-1 祝着。7-2 祝い膳。
８、　七五三
8-1 髪置き。8-2 袴着。8-3 帯解き。8-4 千歳飴。
９、　入学祝い・卒業祝い
9-1 入学祝い。9-2 卒業祝い。
１０、成人式
10-1 元服。10-2 十三参り。10-3 服装。
１１、結婚
11-1 婚姻の形。11-2 結納。11-3 結婚式。11-4 披露宴。11-5 引き出物。
１２、厄年
12-1 東松山市史によると。12-2 贈りもの。12-3 お返し。
１３、還暦
13-1 日本での還暦祝い。13-2 西洋での 60 年祭。13-3 東松山市の還暦祝い。
１４、古希・喜寿・傘寿
14-1 古希。14-2 喜寿。14-3 傘寿。
１５、米寿・卒寿・白寿・紀寿
15-1 米寿。15-2 卒寿。15-3 白寿。15-4 紀寿・百寿。
１６、葬儀
16-1 末期の水。16-2 湯灌の儀。
１７、まとめ
17-1 強く感じたこと。17-2 私の体験。17-3 私達は老老。17-4 老後の後は死。
17-5 調査研究で分かったこと。17-6 今後の取り組み。
１８、活動の記録

1、テーマの選定理由

私達は、国際・文化学部の授業として、「世界に誇る着物の文化」、生れた時から死に至るまでの儀礼・遺言・葬儀など、「自分史」についても学びました。

そこで私達、国際文化学部Ｂ班は、諸外国の習慣文化に併せて、日本のお茶、着物、七五三、厄年などをふくめて研究できる、テーマはないかを話し合い、そのなかで、すべての項目が入っている、「通過儀礼」は、日本の文化だと思うので、これを課題研究のテーマに取り組むことにしました。

私達は、すでに通過儀礼も約半分以上も過ぎておりますが、これから迎える方たち、若い人たち、在住の外国人の方に、日本文化の通過儀礼が役に立つと考えました。

1-1 取り組み内容

着物（和服・衣類）文化にも触れ、現代洋装にも触れて、通過儀礼時（節）に使用する、着物とはどんな服装だったか、また、どんな意味があったのか、生れた時から順次、着る物を中心に、歴史的な意味も含めて、調査研究を実施して行くことにしました。

1-2 活動風景

2、日本の着物（和服・衣類）

2-1 なぜ衣服を着るのか

人間は数千年にわたって、なんらかの形で衣服を身に着けてきた。
原始時代の人達の衣服の発明を促した最大の要因は､寒さや暑さ､湿気や乾燥など、気候から身を守らなければならないという必要性からである。氷河時代の人達は、防寒のために動物の皮等をまとい、一方暑い国の人たちの多くは、今もそうだがごくわずかなものしか身に付けない。衣服は裸が受け入れられない場合に、体を覆い隠すものであったり又､一種のコミュニケーションの手段としても利用されている。日本の衣類の発達は、弥生時代初めのころの衣服が、日本の着物の祖型となっている。その後、社会の仕組により職業の違い貧富の差によって、それぞれの形に違った衣服へと変わっていった。

2-2 日本の着物

日本の代表的な民族衣装である「着物」きものの歴史をさかのぼると縄文時代の貫頭衣にまで辿り着きます｡飛鳥時代の唐文化の影響､平安時代の鮮やかな十二単。

日本の歴史の中で、着物文化は私達と切り離すことはできません。現在一般的に「きもの」とよばれているものは、和服の中の「長着」にあたります。長着の仕立てには、裏の付いたあわせ仕立てと裏の付いていないひとえ仕立てがあり、季節やＴＰＯによって着わけます。

日本の民族衣装である着物ですが、洋服の一般化によって着用する機会が減少しています｡しかし最近ではアンティーク着物や和柄の流行により､若い世代にも人気です。これからの新たなきもの文化に昔ながらの伝統的な作法を織り交ぜ、今後も日本の美しいきもの文化は発展して行くことを望みます。

古代人の着物

高松塚古墳西壁画
女子群像・着物姿

平安時代の着物姿

３、通過儀礼の意義と活動実施項目

3-1、通過儀礼とは

人の一生は、誕生、命名、入学、成人、結婚、就職、還暦、死など、いくつかの節からなっている。こうした人生における節は、個人が属する集団内での身分の変化と新しい役割を意味している。そのため、いかなる社会でも、人生の節の通過に際して、それぞれの節に課された条件を満たす一連の儀礼を行っている。このような人生の節に伴う儀礼を一般的に通過儀礼とよぶ。

帯祝い

出産

お宮参り

お食い初め

七五三祝い

入学・卒業祝い

成人式

結納・結婚・披露宴

厄年

還暦

古希・喜寿・傘寿

米寿・卒寿・白寿・紀寿

葬儀

3-2、冠婚葬祭の文化

日本には昔から、年賀、中元、歳暮、祝い事、慶弔、見舞い、今回着物を中心に取り組みましたが、通過儀礼の中にはたくさんの項目があります。一年を通じての贈り物の交換。お祝い事があった時には、おめでたい品物、又は金一封。慶弔時には、訪問しておくやみを。お見舞い等も含めて親戚、知人、友人が、喜び、悲しみ、いたわり、助け合う、素晴らしい文化がある。

４、帯祝い

着帯祝いともいわれ、妊娠５カ月目の初戌の日に安全を祈って岩田帯を巻く儀礼です。帯祝いは、胎児の無事な成長と妊婦の安産を祈る儀礼です。

岩田帯と言われるさらし木綿か白い綿ネルを、七五三にちなんで七尺五寸三分(約2．3 メートル)に断ち、端に紅で寿の字を書いて半分に折り、折り目を下にして妊婦の下腹に巻きます。そして、この日は慎重に選ばれ、その年の恵方に向かって帯を巻くと良いといわれています。また、犬は安産とされていて、それにあやかるために戌の日にこの儀礼を行うようです。この「帯祝い」の風習は、平安時代には有ったとされていますが、正確な起源や由来はわかっていません。

4-1 地方によって、帯祝いに行われる行事は様々です。
例えば、「安産祈願」とは、無事な出産を神さまに祈る儀礼で、この祈願を着帯の祝いの日に合わせて行うことが多く、 祈願の際には、一般的に各地の産土〔うぶすな〕神社に参拝するようです。また、紅白餅を食べる習慣があるところもあり、これは「帯祝い餅」、「帯掛け餅」、「はらいた餅」とも呼ばれています。そして、紅白餅の中央に小さな小豆が一粒入っており、お餅を包丁で開く時に、この小豆が切れると「女の子」、切れないと「男の子」が生まれるといわれています。

4-2 東松山の一部地域では、買ったサラシの帯でなく夫の一度使った六尺（約 1.8 m）褌をまくとお産が軽くなると言って巻いたものである。

5、出産

医術の遅れていた昔の出産は、母子にとって命懸けでした。出産に臨み加持祈祷を行い、弓弦を鳴らして邪気も払いました。吉日吉方を選んで胞衣を埋め、生児の枕もとに守り刀を飾り、大箱に護身符を入れ、天児（尼児とも書く）という木偶人形（お払いの時に、凶事を移し負わせた人形・お守り）をそばに置いた。

民間では、産土神の信仰が古くからあり、出産すると産飯を炊き産土神に供えました。また、産婦と生児が産屋を離れる日には産屋立ちの祝いもしました。

「安産で生まれ健康に育つよう」との願いが言い伝えとして残されています。

生まれたばかりの子に初めて着せる衣服を、**産着（うぶぎ）**と言い、様々な風習が残っています。

- **てとおし**　→　初めは着物を着せず「おくるみ」にしておき、３～７日後に一つ身より小さく仕立てた、麻の葉模様の着物を着せる。
- **色直し**　→　生まれたては白のきもの、７日目に普通の着物を着せる。
- **後縫い**　→　生まれる前に縫うと弱い子が生まれると言われている。
- **背守り**　→　飾り糸で縦に５針、斜めに７針ほど、男児は裏針で左斜めに、女児は表針で右斜めに縫う。これは火や水に落ちた時に産神が、これを引っ張り助けると言われている。

5-1 ほうきの神様

箒は、古くから神聖な物とされており、箒神が宿ると言われ、箒は掃き出すという行為から出産との結びつきが強い。新品の箒でお腹をなでたり、立てたりすると、お産が軽くなると言います。跨ぐと重くなると言います。

5-2 安産子種石

日光二荒神社の別宮、滝尾神社の境内には、石柵に囲まれた霊石「安産子種石」があり「この石に祈れば子が授かり安産」になると言う。こうした「安産石」は各地の社寺にあると言います。

5-3 ローソク

灯明に使った燃えさしの小さなローソクを、社寺から貰いうけておき、産気づいたらすぐに貰ってきたローソクに、火を付け「軽く早く生まれますようお願いします」と神棚にあげると、燃え尽きぬうちに生児が生まれると言う。

6、お宮参り

6-1 忌明の祝いとも言います。

古来、赤子の命は儚いものでした。やっと世に出たと思ったその命が、わずか二日三日で果ててしまうなど日常茶飯事のことでした。人々は何とか赤子が天に召されることがないように、悪霊の目につかないように祈りました。

そのために生まれてきた赤子にわざと古いものを着せ、自分達が生んだ子ではない、拾って来たんだと言い繕うために、「お捨て」「拾い」などのように命名した人もいたようです。

そんな赤子がなんとか生き永らえ、自分の力で人生を生きていける気配が見えてきた、男児は３１日目、女児は３２日目に氏神様にお参りして氏子になった地域が多いようです。１００日目にお参りする「モモカマイリ」のところもあるようです。社前にお神酒と赤飯を供へ、赤子をツネッテ泣かせ、神様に強い印象を残し、将来の加護を祈りました。

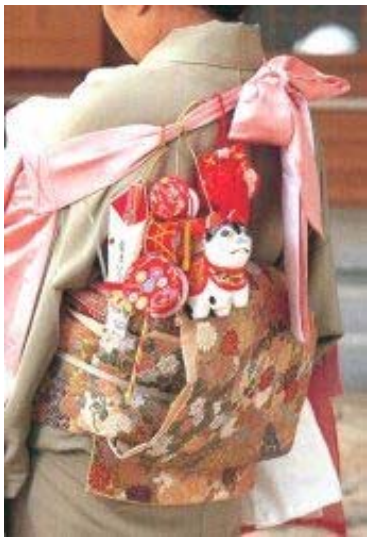
里から贈られた晴れ着は、男児「熨斗目」、女児は「柄模様の晴れ着」を着させていました。

6-2 初山参り

浅間神社は、容姿端麗な花の神「木花之佐久夜毘売」（このはなのさくやびめ）を主祭神としています。

もっとも賑わう７月１４日の初山祭りには、「海幸彦」「山幸彦」の母でもある木花之佐久夜毘売が子供を守護するという信仰から、初めて夏を迎えようとしている誕生日前の赤子に、里から贈られた「ユカタ」を着せ近くの浅間神社に参拝することをいいます。このお参りをすると夏の病にかからないで過ごすことができると言われています。

市史によると、当日の朝は「アンコロモチ」を作り、母親の里や近くの親戚に配りました。



7、お食い初め（おくいぞめ）

お食い初めとは、地域によって異なるが生後１００～１２０日目の赤ちゃんに、初めて食べものを与える儀式です。子供が一生食べ物に困らず健やかに育つことを願いました。

古では生まれて１００日目を色直し、１２０日目を食初としていましたが、今日では、１１０日目に色直しと食初を同時に行うのが一般的です。食初は、箸揃え・箸初めとも称していましたが、これは武家で女性の用いた言葉です。また、武家では食初のことを「色直し」ともいい、これは色のある小袖を着せて祝ったことによります。

昔は上新粉で作った餅と柔らかく煮た大根で離乳食を始める日でした。

7-1 祝着

男児には、めでたい大形の家紋の付いた色のある小袖。女児には、姫小松・若菜・撫子の模様のある色のついた小袖を着せます。

色は十干により、甲乙は赤、丙丁は黄、戊己は白、甲辛は黒、壬葵は青とするのが相性の色と伝えられ、これは男女共通です。

7-2 祝い膳

一汁三采の「祝い膳」は、鯛などの尾頭つきの魚および、赤飯・炊き物、香の物、紅白の餅のほか、吸う力が強くなるとの考えから吸い物、歯が丈夫になるようにとの考えから歯固めの石が供されました。「歯固めの石」は古くからの習わしでは、地元神社の境内から預かりもので、儀式が終われば境内へ納めました。小石の代わりにクリの実を供する地域もありました。

食器は漆器で高足の御膳。器の漆の色は、男児は内外とも赤色、女児は黒色で内側は赤色が使われていました。

８、七五三

数え年、三歳の「髪置き」と五歳の「袴着」、七歳の「帯解き」の成長に応じた行事が一つとなったもので、三歳は男女児、五歳は男児、七歳は女児のお祝いとして神仏にお詣りし、健やかな成長を願います。

8-1 髪置き　それまで剃っていた髪をのばし始め、髷を結う行事で、男女共に行われていました。現在では３歳の女児の祝いで三ッ身の着物を着、お被布を着用します。

8-2 袴着　始めて袴をつける行事で、もともとは女児も行いましたが、服装の変化と共に男児だけになりました。四ッ身の着物に黒の紋付の羽織を着、袴を着用します。現在、宮中行事で行われる「着袴」の儀では、髪を切り揃える「深曾木」の行事も一緒に行われています。

8-3 帯解　それまでの帯の代わりにしていた、つけ紐を取り、本式の帯を結ぶ女児の行事です。本裁ちの着物に揚げをして着用します。

これらの行事は、子供の誕生日近くの吉日に行われていましたが、江戸末期に現在の十一月十五日に定まりました。この日は鬼宿日で、結婚以外慶事にはすべて吉とされたためです。

８-4 千歳飴

七五三につきものの、千歳飴は、江戸時代に浅草の飴売りが売り出した「千年飴」「長寿糖」が始まりです。子供の長寿を願い、紅白の長い飴を、鶴，亀、共白髪の目出度い図案の袋に入れ、お世話になった人たちや近所に配ります。

９、入学祝い・卒業祝い

9-1 入学祝い

入学を許可された者をお祝いする式典の事で、一般的には春の行事である。幼稚園から大学まで其々歴史と文化を踏まえた形容で開催される。昔は着物であったが、現代では学校の制服を着用しての参加が多い。父兄等の参加では特に母親の着物姿が多く見られる。我がきらめき大学も、老若男女幾つに成っても胸わくわくの入学式でした。写真はきらめき市民大学の入学式です。私達も昨年は入学式でした。

9-2 卒業祝い

教育課程を全て修了したことを認定された者を、お祝いする式典の事である。 卒業証書を授与した儀式で、制服での参加が多数だが、大学等では男性が背広に対し、女性の着物・袴での参加が顕著に見られ、女学生の制服としての女袴の歴史文化が脈々と継承されている。私達も２年次で卒業予定ですが、その前に課題研究にて着物文化を極めて修了せねば認定？。写真はきらめき市民大学の卒業式です。

１０、成人式

昔は、男子が元服の儀　女子が十三参りとして 20 歳より早い年齢で大人になった事を、お披露目し祝っていた。日本では古くから成人を祝うしきたりがありました。日本には成人の日があり、満 20 歳になったことを祝い、それぞれの青年男女たちを励ます日で、昭和 23 年に制定された 1 月 15 日でしたが、現在は 1 月の第 2 月曜日に変更されています。

成人式のはじまりは昭和２１年１１月２２日、埼玉県蕨市で「第一回青年祭」としておこなわれた成年式といわれています。

10-1 元服（男子）

おおよそ、12～16 歳で行われ、幼きものが初めて大人の衣裳を着る事が出来るようになり、一人前の男として認められること。男の子は数えの１５歳になると初山参りといって神奈川県にある大山の阿夫利神社に参拝する。これは昔武士が１５歳になると元服をしたのと同じで、険しい山に登れたことによって一人前になった事を示すものです。

10-2 十三参り（女子）

13 歳になった、女の子が始めて振袖を着る日で、昔は 13 歳で立派な成人女性と認められたようである。地域によっては、裳着の儀と呼ぶ所もあるようです。

10-3 服装

未婚女性の第一礼装としては振袖なので、思いを込めて選び着用しました。
育ててくれた両親や家族に感謝し、大人への旅立ちを祝い責任や自覚をもつための儀式とされました。子供の成人の記念に着物を着せたいという親たちの要望などが多いようです。近年、日本人の着物離れが進んでおり、若者に日本のよさをアピールする良い機会となっています。最近では、女性だけでなく、男性の紋付袴などの着物姿も多くなってきています。
和服は、高価であるためレンタルで済ませる人も多いようです。

１１、結婚

1-1 婚姻の形

日本の結婚の歴史は民族的には婿入婚から嫁入婚への移り変わりからみることができます、一夫一婦制が民法で定められて、配偶者ある者は重ねて婚姻をすることができない。刑法第１８４条で重婚は２年以下の懲役としています。

11-2 結納

結納とは両家が金銭、酒肴など結の物を取り交わし親族となることを確認し祝う儀式である。結納の形式は地方によってさまざまで、一般的に関東では「交わす」関西では「納める」といいます、関東では往復型結納と言われる習慣があり、使者として仲人が両家を行き来し、結納品を届けます、男女とも結納品を用意し、男性からは結納金（帯料）を、女性はその半額を袴料として同日に交換する形式です。

一方関西では、両家と仲人が一同に会する略式の片道型結納で主に男性が結納品を贈ります。その他目録の書き方、飾り方なども地方によって異なります。

11-3 結婚式・白無垢、「嫁ぎ先の色に染まるため」と言われる白無垢ですが生まれた家で死んで、嫁ぎ先で再び生まれるための死装束だからだとか、結婚式は女性が神に仕える式なので清浄な白い衣装を着ているなど由来はさまざまである。

和装婚礼衣装で最も格式の高い衣装とされている。打ち掛け，掛け下、下着、小物などすべて白で統一、綿帽子、又は角隠しをかぶります。

角隠し・・「角を隠し従順に従う」

11-4 披露宴・色直し

白無垢から色打ち掛けに着替える､花嫁が嫁ぎ先の色に染まったことを表現する。神に仕える結婚式に清浄な白い衣装で臨んだ花嫁が人間の世界に戻ったために着替える、衣装を次々に着替えて招待客に披露します。

振袖・・絞りや金襴などの豪華な刺繍が施されあでやかな印象が際立ちます。

11-5 引き出物

披露宴の列席者に感謝の気持ちを込めて渡す贈り物です。引き出物の数は割り切れない３品、５品、７品が喜ばれますが結婚した二人仲が割れないようにという願いを込めています。

12、厄年（やくどし）

厄年とは文字どおり災厄に遭いやすいとされる年齢です。厄年の風習は平安時代からあり、陰陽道に起源があるといわれていますが、はっきりした根拠などは不明です。

厄年を何歳とするかは神社仏閣などによって異なります。一般的には数え年で

男性　4 歳、13 歳、25 歳、**42 歳**、61 歳

女性　4 歳、13 歳、19 歳、**33 歳**、37 歳、61 歳などです。

12-1 東松山市史によると

男性　15 歳、25 歳、42 歳、

女性　13 歳、19 歳、33 歳、が厄年です。特に男性 42 歳と女性 33 歳は大厄といわれ、その前年はマエヤク、その年はホンヤク、明くる年はアトヤクなどといわれています。その年ごろは、社会的にも、肉体的にも大きく変化する時期であります。

42 歳の男性は川崎大師に厄落としに行く。19 歳、33 歳の女性は川崎大師か川越大師にお参りし厄落としをしたようです。

12-2 贈りもの

厄年の人への贈り物には、長い物が良いとされています。その人に長生きをして欲しいという意味が込められているようです。東松山市史によると 33 歳になったお嫁さんは里から帯を貰います。この帯に厄をのせ早く擦り切れれば、それだけ早く厄から逃れられるということで、一尺の半分幅の帯で、一度使い古した布を切り裂き横糸にして織ったものでウロコの模様があるのでウロコオビともいいます。軽くて使いやすく、よわく、値段も安いものでした。

12-3 お返し

3 年間の厄年を終えれば、まずは一安心です。「厄が落ちた」といって、食べものや日用品などの消耗品を贈ります。消耗品を贈るということは、厄が後に残らないようにと言う意味があります。忘れずに贈り、厄が残らないようにしましょう。

１３、還暦（かんれき）

長寿を祝う還暦は、元服、婚礼と並ぶ人生における三大祝儀の一つに数えられ、家長制の強かった封建時代の名残です。そのためか、祝いの対象になるのは男性だけで、家長は数え年 61 歳になると、家督を後継者に譲り、引退するのがしきたりでした。したがって還暦は単なる長寿のお祝いというよりも、その家の家系が代々続き、家業が繁栄することを願う儀式としての性格が強かったと言われています。

還暦の語源には、干支が関わっているようです。十干と十二支の組み合わせが一巡し、起算点となった年の干支に戻ることです。

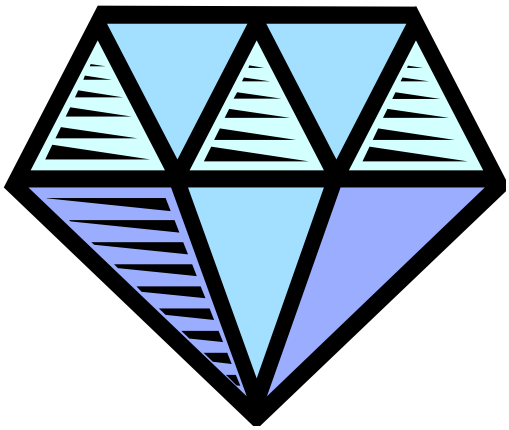
十干とは、甲（こう）、乙（おつ）、丙（へい）、丁（てい）、戊（ぼ）、己（き）、庚（こう）、辛（しん）、壬（じん）、葵（き）の総称です。もともとは、日の順序を示す符号であったようです。

十二支とは、子（し）、丑（ちゅう）、寅（いん）、卯（ぼう）、辰（しん）、己（し）、午（ご）、未（び）、申（しん）、酉（ゆう）、戌（じゅつ）、亥（がい）の総称です。もともとは、十二ケ月の順序を示す符号であったようです。これでは覚え難らいので、それぞれに動物を割り当てて呼ぶようになりました。これを十二支獣といいます。十二支は月のほか時刻、方位をあらわします。

また, 30 周年を半還暦、120 周年を大還暦といいます。今年還暦を迎える人は昭和 29 年生まれの人達です。

13-1 日本での還暦祝い

還暦の祝いでは、これからも健やかに元気で過ごせることを祈願し、本人に赤色の衣服等（頭巾・ちゃんちゃんこ・座布団・扇子）の 4 品を贈りましょう。かつては魔除けの意味で産着に赤色が使われていたため、生まれた時に帰るという意味でこの習慣があります。



13-2 西洋での 60 年祭

西洋では、ダイヤモンドを 60 周年の祝いに贈ったり、60 周年の象徴とする風習があります。結婚 60 周年はダイヤモンド婚式ともいい、殊にウィクトリア女王の即位 60 周年は、ダィヤモンド・ジュビリーとして盛大に祝賀されました。

13-3 東松山市の還暦祝い

東松山市史の民俗編によると、紫色の敷布団を還暦の祝いに子供が親に贈ったようです。紫色は褪めやすく元の地色に戻り若がえるという。また尻の厄介にならないということで贈っていると言います。

14、古稀・喜寿・傘寿

14-1 古稀（こき）

古稀は数えの 70 歳（≒満 69 歳）で長寿の祝いとされている。お祝いの色は、喜寿、傘寿と同じ紫色です。

今年古稀を迎えるのは、昭和 19 年うまれの人達です。

唐の詩人杜甫（とほ）の詩・曲江（きょっこう）「酒債は尋常行く処にあり人生七十古来稀なり」（酒代つけは私が普通行く所には、どこにでもある。しかし、七十年生きる人は古くから稀である）に由来します。

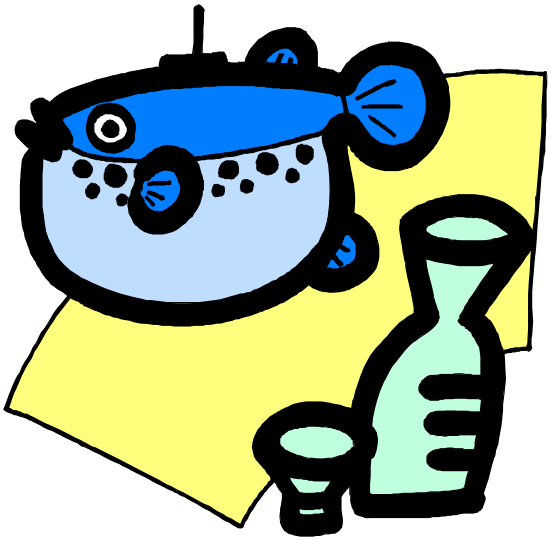
14-2 喜寿（きじゅ）

喜寿は数えの 77 歳（≒満 76 歳）で長寿の祝いとされている。「喜」の草書体が七十七となることから喜寿といわれます。市史の民俗編によると、年を取っても息切れなく吹き続けられ、元気に仕事が続けられることから、親戚や近所の人達に水引きをかけて「火吹き竹」を配ったようです。今年喜寿を迎えるのは、昭和 12 年うまれの人達です。

14-3 傘寿（さんじゅ）

傘寿は数えの 80 歳（≒満 79 歳）で長寿の祝いとされている。

「傘」の略字が八十（仐）に見えることから傘寿といわれます。今年傘寿を迎えるのは、昭和 9 年うまれの人達です。



15、米寿・卒寿・白寿・紀寿

15-1 米寿（べいじゅ）

「米」の字を分解すると八十八となることから、数えの 88 歳（≒満 87 歳）で長寿の祝いとされており、よねの祝いともいいます。鳩のかざりのついた杖を贈る習わしや、寿福にあやかるために、穀物を計る「一斗枡」を贈る習俗があったようです。また、江戸時代以降の習俗であり、身内でお祝いをすることが建前であるようです。お祝いの色は、金茶です。

15-2 卒寿（そつじゅ）

卒寿は数えの 90 歳（≒満 89 歳）で長寿の祝いとされております。「卒」の字の略体が九十に分解できることから卒寿といわれます。お祝いの色は、金茶か白色です。

15-3 白寿（はくじゅ）

「百」の字から「一」を取ると「白」の字になることから、数えの 99 歳（≒満 98 歳）で長寿の祝いとされています。
お祝いの色は白で、古来よりもっとも神聖な色として神事のために使われてきました。そのため汚れのない清らかな象徴として白寿に使用されているようです。

15-4 紀寿・百寿（きじゅ・ももじゅ）

紀寿は数えの 100 歳（≒満 99 歳）で長寿の祝いとされています。紀寿・百寿のいわれは見てのとおり、100 歳のお祝いです。紀寿祝い（紀は一世紀のこと）ともいわれます。お祝いの色は、白色か桜色です。

１６、葬儀

人生最後にやってくる儀礼です。一般的には、臨終の後、納棺し、通夜を行います。その後葬儀・告別式、出棺、火葬を行い、遅くとも一年以内に墓へ納骨します。

16-1 末期の水、魂呼ばい、枕飯日本の伝統的な葬送習俗があります。
「末期の水」は臨終を告げられた後、近親者がその人の口に含ませる水で、あの世で飢えや渇きに苦しまないようにするものです。「魂呼ばい」は死者の枕元や屋根に上り、故人の名を呼び、その体から抜けた魂を呼び戻そうとするものです。「枕飯」は故人の使っていた茶碗に米の飯を高く盛り、中央に箸を立て、枕元に供えるものです。魂は体を抜けた後、葬儀の前に一度長野市の善光寺へ行くという俗信があり、枕飯はその際食べる弁当だとされています。

葬儀用・死出の旅・死装束

葬儀用・礼服

16-2 湯灌の儀

死出の旅に出る支度を整える、遺体に対しては、湯灌の儀が行われます、かつては先に水を入れ、後から湯を足すという、日常とは逆の手順で作ったぬるま湯（逆さ水）で遺体をきょめました。最近では、ぬるま湯やアルコールで湿らせたガーゼなどで代用することが多いようです。その後、男性は髭をそり、女性は死に化粧をし経帷子という着物を左前に着せます。経文を記した、経帷子を着ていれば、地獄に落ちる者の罪を滅ぼされ、極楽往生できるといわれているからです。
手足には手甲と脚絆をつけ、足袋は、左右逆にはかせます。
数珠や草鞋、三途の川の渡り賃でありこずかいでもある六文銭や、五穀を入れた頭陀袋などを持たせるのも冥土への旅支度です。また、意外なことに三角巾は烏帽子から？、平安時代以降烏帽子は男性の象徴でありました。子供たちも大人の真似をして烏帽子の代わりに三角の布を額に結えて遊んでいました。これが後代死者の威儀を正すための死装束の一つになったと言われています。
ちなみに遍路の白装束は死装束ともいわれ道中どこで倒れてもかまわないという覚悟の表れといわれてます。

１７、まとめ

今回私達のサークルが、「日本の通過儀礼と着物文化」というテーマに取り組んだ理由は、人々が長い間の生活の知恵と会得してきた伝統的な儀礼であって、特別なものではないと感じていたが、現在まで多少の変化は有るものの継続されてきました。通過儀礼の内容と衣食住について調査研究すべきだと考えられますが、時間的制約から、内容を着るものに絞り込んだ。幸いにも研究熱心なメンバーに恵まれ、自分の調査研究した原稿を持ち寄り、意見を交え、取りまとめた。

17-1 強く感じたこと

昔も今も子供を大切に育てることに、両親はもちろん家族親戚までもが精力的に働いてきたことです。特に昔は医療や衛生面が未発達で乳幼児の死亡率は高く、成長する子供は幸運とされていた。そのため神社・仏閣へお参りをして、無事に成長することを強く願ったことです。

17-2 私の体験

私が 10 歳のときです。母親が自宅で一番下の妹が生まれそうだ、早く産婆を呼んで来いと言われ、あわてて呼びに走りました。産婆は、すぐ湯を沸かして待って居ろでした。子供が生まれる前から腹帯を巻き、生まれて来たら、今度は食事に気を付け 3 歳になった 5 歳に 7 歳になったと喜び成長を祝った姿が目に浮かびます。

昔は、「向こう三軒両隣り」でお祝いをしていたが、今は少なく成った。

17-3 私達は老老

メンバーの中には通過儀礼が半分以上過ぎていると言った人がいます。私達は今、老老の真っただ中だね。少し休憩しますか等と、和気あいあいの中で課題研究は進んでゆきました。

17-4 老後の後は死

葬儀は簡素化が進み、服装も洋装化されてきた。密葬や家族葬が多くなってきているようです。

17-5 調査研究で分かったこと

お宮参りや七五三、結婚の風習、長寿の祝い等、昔から続く通過儀礼が有ります。しかし、人々の思想、社会構造の変化等により廃れつつあるのも事実です。そんな中、今でも根強く残る儀礼もあります。お宮参りや七五三で晴れ着に身を包み、お参りに行くのも一般的です、厄年のお払いに行く人も途絶える気配はありません。通過儀礼の中心は「子供が無事に育ち、長生きできるように」との思いと願いいがあるからです。

17-6 今後の取り組み

人によっても異なりますが、生まれた時は神社・結婚式は教会、お葬式はお寺が、日本の社会では一般的で自由に選べます。これは世界に例を見ない日本独特の文化ではないか。今回の課題研究の結果を、孫・子供・若者・在住外国人等に伝えて行きたい。

１８、活動の記録

回数	月日	場所	内　　容
1	01/23	きらめき大学	メンバー・顔合わせ・役割分担
2	02/06	きらめき大学	テーマの説定について
3	02/20	きらめき大学	テーマの説定・今後の予定
4	02/27	きらめき大学	テーマの内容について
5	03/06	きらめき大学	テーマ内容、4 分割にし担当を割り振り
6	04/17	きらめき大学	各担当から原稿提示
7	04/24	きらめき大学	概要版を提示（各人に配布）
8	05/01	きらめき大学	概要版の意見交換、各担当現行の検討
9	05/29	きらめき大学	各担当調書について意見交換
１０	06/19	きらめき大学	各担当調書の集約
１１	06/26	きらめき大学	集約版を配布、意見交換
１２	07/10	きらめき大学	各担当調書のページ調整
１３	08/07	きらめき大学	全体を通しての確認、
１４	08/28	きらめき大学	意見交換
１５	09/04	きらめき大学	意見交換
１６	09/11	きらめき大学	意見交換
１７	09/25	きらめき大学	意見交換
１８	10/23	きらめき大学	意見交換
１９	11/06	きらめき大学	意見交換
２０			

参考文献

年中行事、儀礼辞典、川口謙三、池田孝、池田弘、
東松山市史、
中央公論社、服装の歴史、
佐藤龍夫、わごよみの暮らし、
世界大百科事典、
赤ちゃん、子供のお授け、（川合書房）
原色百科事典、（小学館）
日本服飾小辞典、（日本和装協会）